

史料館所蔵最古の歩兵第十六聯隊史

「第四回」明治三十七八年戦役

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【様子嶺附近の戦闘】

七月末に至りて、敵の運動は愈々活発となり、其の主力は大安平及び第十二師団方面に、別に一個兵団を様子嶺方面に集中して其の総兵力約四個師団に達し、再び攻勢を取らんとするの形勢歴然たるに至れるを以って、我はむしろ進んで之を撃破するに決し、七月三十日左の如く攻撃部署を定められた。

- 一、 近衛師団は馬勾門子・下韓家堡子附近より様子嶺に向い攻撃す。
- 二、 第二師団（歩兵四個大隊欠）は厩溝方面より様子嶺及び北方高地に向い攻撃して近衛師団に協力す。
- 三、 第十二師団は楡樹林子附近の敵を攻撃す。
- 四、 歩兵第十五旅団（二個大隊欠）は楡樹林子附近の敵の右翼に向い前進し、第十二師団を援助す。

すなわち第二大隊は岡崎旅団長の指揮に属し、村松聯隊と共に下馬塘に集合して軍司令官の直轄となり、第十一・第十二中隊は李家堡子北方谷地に至りて師団の予備を命ぜられ、谷山聯隊長は残る六個中隊を率いて三十日午後九時四十分石門嶺を出発し、白川少佐の指揮する第九・第十中隊を前衛として、暗中険路を辿りつつ前進し、三十一日払暁目的地たる謝家堡子西南高地に達して、高地の稜線上に防御工事を施し、馬家堡子及び英泥崗附近に遠く将校斥候を派して敵情を偵察したる結果、我が前面の敵兵は、約一個中隊馬家堡子北方高地に、約五百名尚泥崗附近に在ることを偵知し、更に午前午後に亘りて星野中尉及び原田小隊を敵情偵察の為派遣し、両隊は是等の敵と射撃を交換して其の兵力を偵知したる外、主力の前面は終日敵と接触するに至らなかった。

午後七時三十分聯隊は一中隊を頭道溝に残し、他は甜水站北方三叉点附近に到りて本戦に参加すべき師団命令に接し、聯隊長は第二中隊を現地に残留せしめ、自ら残余の五個中隊を率いて午後九時、陳家堡子を経て往路と同一の行路を経て石門嶺下に出て、八月一日午前四時甜水站到着して師団の予備となり、同夜楊家房大西溝、二道嶺及び其の附近に宿営して李皮峪及び大安平方向に対して警戒した。岡崎支隊に属せる第二大隊は長貝嶺附近に於いて此の日若干の戦闘を交えた。

師団予備たりし第十二中隊は青石嶺東方高地を占領して、歩兵第三旅団の戦闘を助け、同十一中隊は塔湾東南方高地に在って第三・第十五旅団の連絡に従事した。

此の戦闘に於いて我は右翼二道河子・李皮峪に亘り、中央王家堡子より青石嶺に及び、左翼は様子嶺より康家西溝に亘る線を占領し爾後聯隊は楊家房附近に滞在す。

【遼陽附近の会戦】

会戦以来すでに半歳、此の間奥大将の第二軍は金州南山に敵の前進支隊を撃破して、満州大陸と関東半島との咽喉を扼し、旅順要塞の攻撃を乃木大将の第三軍に譲って、北進して得利寺附近にシタケリベルグの南下軍を一蹴し、大石橋の戦闘を経て海城に出て、大孤山に上陸したる独立第十師団は岫巖を屠り分水嶺を攻略し、次いで野津大将の第四軍に編入せられて柞木城を抜き、海城附近に於いて第二軍と連絡し、満州軍総司令官 大山元帥は総参謀長 児玉大将以下の幕僚を従いて海城に進んで総指揮を執り、今や三軍呼応して三面より敵の第一期決戦地と為せる遼陽に迫った。

遼陽は、鴨緑江の水源に盤屈する長白山脈と、方二十マイルに亘る遼河平原上の境界線に接する要衝であって、敵将クロパトキンは此の地を以って第一期作戦の主陣地となし、此れに日本軍を誘引して一挙に撃破するの計画を立て、是までは敗戦毎に「予定の退却」と称して居た。事実又戦役の大体より観れば、従来戦闘は何れも一つの支隊戦、準備戦に過ぎなかった。日露両軍の主力は始めて遼陽附近に於いて会したのである。

遼陽総攻撃の機熟して、八月二十三日第一軍は一斉に運動を起した。当時敵は紅砂嶺・弓張嶺を経て大甸子及び大相屯附近に亘る線を守備し、又遼陽停車場及び其の東方太子河右岸には優勢なる兵力を集中していた。

すなわち敵の陣地は十数哩に亘り、絶壁を成せる高地脈に半永久的の堅塁を築けるものにて、到底白昼正兵を用いるの望みなきを以って、黒木大将は苦心の結果、左翼近衛師団をして貨郎溝北方高地～邊江湾西方高地線を占領して敵を牽制せしめ、第二・第十二師団をして各其の前面に大規模の夜襲を強行せしめるに決した。

右翼第十二師団は寒坡嶺以北を強襲し、大西団は其の左翼に連なって歩兵第十五旅団は弓張嶺、同第三旅団はツエゴウ南方高地に向うべく部署された。斯くの如き大夜襲は殆ど前古未曾有である。

【弓張嶺の夜襲】

師団長は、此の大夜襲に当たり予め部下に訓示して曰く。

「今や我が首力は、大部隊を以って前古無比の大夜襲を行わんとす。生還固より期すべからず。古人戦場に出もの名香を焚いて兜に納めるときく。是死後の汚醜を恥ずるが為なり、我が将士も又之に鑑みて、シャツを新たにし、死後に汚辱を残す勿れ。凡そ夜襲は、隊伍混乱して同志相撃つの弊に陥るを常とす。故に今回の夜襲は射撃を厳禁し、静かに敵前に

迫りて、白兵突撃に移るを法とす。肉弾以外誓って銃火を開くべからず。夜色暗澹たるの際、敵味方を識別すること甚だ難し。故に各将卒は悉く白布の腕章を附して目標となすべし」

谷山聯隊長は此の訓令に基づきて、更に細密なる制令を發し、暗号を定め、喫煙を禁じ、劍身に高粱の藁を捲き、縄を以って各隊の連絡を確實にする等、野戦に関する準備は残る所なく整えられた。

(旅団命令)

「師団は二十六日黎明、弓張嶺と其の西南高地脈の敵を攻撃せんとす。

当旅団は二十六日午前五時を期し、弓張嶺の南方千五百メートルの高地を襲撃せんとす。

歩兵第十六聯隊及び工兵一個小隊は第一線となり、二十五日午後十一時弔魚台（王家堡子南方部落）を發し、翌朝五時を期して前記高地の敵に向い襲撃すべし」

此の高地は右弓張嶺、左三〇〇高地の間に突出せる、此の方面の鎖鑰にして敵は頂上まで三線の散兵壕を構成して、嚴重に據守していた。

二十五日午後十一時、第二大隊（第五・第六中隊欠）を唾叭嶺子に進めて聯隊の開進を掩護せしめ、聯隊主力は第一・第三大隊を第一線、第五・第六中隊を第二戦として二十六日午前二時唾叭嶺子西側に開進を終わり、所命の高地頂に向って前進し、暗中驟雨の如くに降り注ぐ銃弾を物ともせず、全員枚を銜みて猛進を続け第一散兵壕の中央に突入して、突嗟の間に之を占領し敗敵に追尾して更に中腹の第二壕に突入せんとしたが、頂線及び南方斜面より酷烈なる十字火を蒙って、忽ち多数の死傷者を生ずるに至った。

而もこれが為に隊伍は一糸も乱れず、闇をつんざく号笛を合図に一斉に敵陣に突入し白兵を揮って縦横に奮戦中、第二大隊（二中隊欠）も又突如として敵の左翼に突入せる為敵は遂に支える能はずして、最高頂の本陣地に引揚げ、此に踏み止まって最後の抵抗を試みた。

茲に於いて予備隊たる第五・第六中隊を第一線に増加し、猛烈なる準備射撃の後、軍旗と聯隊長とを先頭として全員三面より潮の如く山頂に突撃し、白兵接戦の後午前五時、東天かすかに紅を染める頃、敵を弓張嶺方面に撃攘して同高地全部を確實に占領した。

此の時未だ第十二師団及び歩兵第三旅団は、共に其の目標を達せざるを以って、聯隊のみ濫りに突出して進み難く、又友軍を援けんにも地形断絶して思うに任せず、終日所在に出没する敵を射撃し、同夜戦闘隊形のまま露營した。前夜来、我に対抗せる敵の兵力は歩兵約一個聯隊であった。

引続き二十七日払暁までの激戦に依って、敵の第一防御線は悉く我が軍の手中に帰し、

爾後敵をして歩々防御の違もあたえず、数日急迫して遂に其の本防御線に圧迫した。

聯隊は二十七日午前九時、友軍の目的達成と共に第二大隊を進めて次溝高地附近を占領し、午後六時更に主力を以って蘇家堡子及び陳家堡子附近諸高地を占領して同夜陳家堡子附近に露營、二十八日更に前進し小戦闘の後大安平高地を占領し二十九日、朝石咀子西方高地を占領した。

是より遼陽城は僅かに三里の前面に在り、遼左の大平原は海の如く遠く展開せる間に、砲声殷々として轟き、汽車は黒煙を吐いて南送北馳し、回光信号は閃々として空に閃くなど、光景頗る壯快を極めた。

各軍は夫々前面の敵を撃破して、遼陽城外第二防御線に肉薄し、三十日払暁より一千余門の全砲挙げて三面より敵陣地を轟撃し、炸煙空を覆いて天日為に暗く、砲声は山野を震わして地軸為に崩れるかと思はしめた。

此の間に我が第一軍は総司令部より太子河右岸に迂回の命を受け、聯隊は第二大隊（第五・第七中隊欠）を石咀子に留め夜雨を冒して湯河の濁流を渡り、一旦姑嫂城南方に集合の上、三十一日午前二時出発、漆黒の如き暗夜に霏々として降りしきる雨を衝いて、三里の悪路を急行して天明の頃徒渉点たる太子河岸連刀灣に達し、急湍矢の如くにして、水深胸部を歿する太子河を徒渉して、午後六時官屯附近に開進を終わり同西方高地を占領して夜を徹した。

【黒英台附近の激戦】

八月三十一日第十二師団及び我が岡崎旅団が太子河右岸に達するや、黒木軍司令官は危険を冒して前線に急行し、親しく此の先進隊を督励して、短兵急馳して敵主力の背後を衝かんとし、翌九月一日を以って我が旅団が三昼夜の苦戦を重ねたる黒英台の激戦は、其の序幕を開くに至ったのである。

当時我が前面の敵は寶浄山・時官屯・黒英台の高地線を連ねて堅固なる防御工事を施し、殊に黒木軍が此の方面に進出すると殆ど時同じくして、クロパトキン大將は正面（首山堡の線）の戦況非なるを見て、之を第二戦陣地に退却せしめると共に其の主力三軍団以上を急遽此の方面に移し、時官屯高地を旋回軸として我が第一軍を突破し、以って其の態勢を挽回せんと必死の力を傾けたのである。

従って此の方面に於ける戦闘の激烈なりしは頗る理由あることで、同時に黒木軍の責任ははなはだ重要であった。

旅団は第十二師団の左翼に連なって、一日午前八時より攻撃を開始し、先ず砲撃を以つ

て皇姑墳西北丘阜に在る約二個中隊の敵歩兵を撃退し、次いで砲火の威力漸く発揚するを以って、午前十一時聯隊は（村松聯隊の左翼に接し）仁平少佐の第三・第五・第七中隊及び白川少佐の第二大隊（第十二中隊欠）を第一線として攻撃前進に移り、萬弩斉発的の猛射を受けつつ、高粱地皺を利用して敵前七八百メートルに肉薄して、ひたすら突撃の機を待てる時、我が右方に連なれる木越旅団は、本隊の急を救うべき突如として北方に転進するに至れる為、旅団は全く孤立の姿に陥った。

やむを得ず一時攻撃を中止し、敵の管制下に服して対戦しつつ黄昏に及んだ。此の際散兵線に起って士卒を激励しつつあった白川少佐は、敵弾に口中を貫かれて後方に退いた。

かくて夕陽全く沈み、暮色蒼然として山野を包むと共に再び徐々に攻勢に転じ、咫尺を弁ぜざる（しせきをべんぜざる：近い距離でも区別が出来ない）宵闇に、鹿柴（ろくさい：ししがき）の如く倒伏する高粱畑を越えて、二日午前一時村松聯隊が壮烈なる突撃を重ねて黒英台を占領すると同時に、其の左翼に連繋して時官屯北方鞍部に亘りて突撃し、奮戦激闘の後遂に此れを占領した。

敵兵は続々として増加し、前面一帯に瀰漫せるに反して我が友軍歩兵第三旅団は未だ我と斉頭面に達せず、近衛師団は転進の途に就かず、加えるに第十二師団は優勢なる敵を引受けて苦戦中にて、ややもすれば連絡さえ絶えなんとする状況に在り。依って旅団は進撃を中止して現陣地を死守するに決し、聯隊は同高地西南部より其の南方を、村松聯隊は我が右翼に連繋して共に黒江台の高地を守備して友軍の進出を待った。

二日天明と共に百余門の敵砲は、三面より一斉に我が陣地に向って火蓋を切った。之に対する我が砲数は僅かに二十門、為に我が後方連絡は殆ど全く途絶して、残り少なくなれる道明寺を唾と共に嚙下して僅かに飢えを凌ぎ、脚を蔽うにも足らぬ半成の散兵壕に一身を託して、唯死をこれ待つ状であった。

斯かる所に、歩兵第四聯隊の第一大隊（下林少佐）急行軍を以って戦線に到着したるに少しく力を得て、我が第十二中隊は時官屯西南方一三三高地を占領し、次いで下林大隊を同高地に進め協力して寶浄山の敵に対抗し、幾度か優勢なる敵の襲撃を支えて奮戦健闘したが、兵力の懸隔甚だしき為まさに全滅に陥らんとし、第五・第七中隊の掩護に依って午後三時四十分辛うじて現陣地に退却した。

又沙澁屯附近に在った敵の歩兵約一個聯隊は、巧みに高粱に隠蔽しつつ我が前面に来襲した。我は知らざる真似して之を陣地前六百メートルまで接近せしめ、俄然一斉に猛烈なる急射を加えて一時間の後多大の損害を与えて撃退した。

然しながら此の前後より敵線は一般に活気を呈し来たり、暮色四辺を閉じる頃、寶浄山のある約三個聯隊の敵歩兵は、続々我に向って運動を始めるを見て、将卒共に敵の一大逆

襲を予想し、将校は其の携行書類を焼き、士卒は互いに後事を託して死を決し、三面より殺到する大敵を太子河を背にする此の一小丘に引受けて、聯隊は軍旗と共に此の饅頭山に全滅すべしと覚悟した。其の光景は沈痛にして壮烈、志気は愈々旺盛を極めた。

果たせるかな、此の敵は時官屯附近に集合したる後、午後七時悲壮なる軍樂を奏しつつ聯隊の正面に突撃し来たり、瞬く間に三四十メートルの距離に肉薄し、一呵して我が旅団を粉碎せんとした。

之に対して旅団は一切の予備隊を挙げて戦線に増加し、負傷兵及び将校に至るまで悉く銃を執って必死となって防戦したる結果、流石に勇猛なる敵も交戦一時間、多大の損害を受けて高地西麓に退却し去った。

此れを最初として、午後八時より翌未明に至るまで引続き四回の大逆襲を繰返し、其の都度激烈なる接戦及び爆弾戦を行い、悪戦苦闘の限りを尽くして我又少なからぬ損害を蒙りながら、遂に陣地を一步も退かなかった。

殊に三日午前三時の大逆襲は最も猛烈を極め、敵は遂に我が散兵線を突破して陣地に侵入せる為、惨憺たる混戦乱闘は各所に於いて開かれ危うく総崩れとならんとする時、「軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」と勅諭第一条を高唱する者あり、為に重傷者も憤然として起ち、勇氣更に百倍して憤激突進、村松聯隊に対する敵の一角に僅かに乗ずべき間隙あるを発見して、我が一部は猛然猪突して終に此の一翼を突破した。

此処に端なく破綻を生じたる敵は、到底快復の見込みなしと観念し夜の未だ明けざる午前四時三十分を以って全軍総退却を開始した。

同夜命によりて急行到着せる友軍第三旅団と第一線を交代して、下岔溝西南谷地に至り師団予備となりて始めて数日振りにて露營の夢を結んだ。後黒木大将は此の激戦を記念する為黒英台高地（饅頭山）を岡崎山と命名せられた。

黒英台に於ける聯隊の損害は、戦死三十九名、負傷二百二十八名。彼我戦力の比較は、我が軍戦闘総員八千四百に対して、露軍戦闘総員三万六千五百であった。

【沙河の大会戦】

遼陽の決戦に敗れた露軍は、奉天を以って第二の根拠地となし、遥かに遼陽附近に屯せる我が軍に対して居たが、其の損害が以外に軽微であったのと、新たに増援兵を得て其の戦闘力は寧ろ遼陽戦闘当時に比して増加し、兵員二十二万、砲七百五十門に達せる上に露本国ではクロパトキンに対する非難の声が大分高くなって来た。

敵將は茲に一大決戦を試みんと決心し、滔天（とうてん：勢い盛んなこと）勇を奮って攻勢に出で、殊に本溪湖附近に於ける我が軍の守備薄弱なるを看破して、潮の如く本溪湖・大嶺・土門子嶺方面に来襲し、兜山の防御線は一時悉く敵の手中に帰して軍の右翼は極めて危険に瀕した。

彼が未だ悉く渾河を渡らざるに先だつて、之を迎撃せんと十月七日を以って全軍戦闘配置に就いた。此の時に於ける我が兵力は、歩兵百二十三個大隊、騎兵四十六個中隊、工兵二十四個中隊、砲五百門（内機関砲二門を含む）に過ぎなかった。

総司令官は深く我が将卒の忠勇に信頼し、よく此の劣勢を以って敵の大兵を撃破し得るべき確信を有した。

九月七日より同九日まで、聯隊は閑院宮殿下の指揮せられる騎兵旅団の支援として一個大隊宛交互に前哨線、前拉子寺高地に派遣し九日（第一大隊当番）午後二時優勢なる敵の襲撃を受け、騎兵第二聯隊第一中隊の退却を收容して前哨線に引上げる際、其の後衛を務めた我が第一中隊の小隊長 山井中尉は重傷を負い、尚下士以下数名の負傷者を出したる外未だ聯隊として戦線に立つに至らなかった。

（三家子附近の戦闘）

九日午後三時警急集合の命を受け、旅団は歩兵第三旅団の左翼に連なり、後華子溝北端を経て起台子北方高地を占領して戦闘準備の姿勢を取り、十日夕頃より運動を起して水原子附近に進出し夜陰に乗じて防御工事を施し、払暁までに半拉山子附近に展開を終わって後命を待つ中、天明と共に砲戦開始され午後其の効果現れるに及びて、旅団は三家子（当聯隊）並びに其の北方拉子寺高地（村松聯隊）に向って攻撃前進を開始した。

我が前進地区一帯は、高粱悉く刈取られて恰も広漠たる練兵場の如く、敵はポンプにて水を注ぐ如く銃火を注ぎ、三城子山麓の敵砲兵陣地からは激烈なる側射を浴びたが、幾度か銃砲弾の洗礼を受けたる我が将卒は、平然として猛火の下に、操典に示せる通りの中隊毎の躍進法を以って漸次敵陣に肉薄し、約五六百メートルに接近せる時又復拉子寺西側に歩砲兵連合の一隊現われて猛射を始め、我は三面より雨の如き銃砲弾を受けるに至り、一全弾は吾が軍旗の中央を貫いて炸裂するなど凄惨なる状況中に在って愈々勇気を奮って猛進し、終に西部三家子に突入して其の北端を占領した。

之と前後して村松聯隊は拉子寺高地を占領し、歩兵第二十九聯隊は東部三家子に突入したが、敵兵頑強に抵抗せる為夜に入って尚混戦乱撃を続けつつあり。依って仁平大隊を右翼に急派して之を援助し、同部落占領後同聯隊は東三家子に、村松聯隊は寺山に、当聯隊は西三家子に各々応急防御工事を施して嚴重に守備し、暗夜に乗じてしばしば逆襲し来る敵兵を撃退した。

同夜十一時半、敵は陣地を棄てて密かに北方に退却し去り、聯隊の一部は直ちに代って之を占領した。

(八家子北方高地の戦闘)

十二日午前四時聯隊（三中隊及び大隊本部一欠）は西部三家子を発し、第三大隊を第一線として下焼達溝西方高地を経て午前五時、八家子に達し同地北方一五五高地に向って前進し、急峻にして且つ一樹一物の隠蔽なき斜面を草の根に縋り巖角を攫みて攀じ登り、まさに其の頂点を占領せんとする時、俄然敵兵出現して猛射したるを以って、急遽大隊は一団となりて山頂に突撃し、彼我入乱れて或いは石を投げ打ち白兵を交えて格闘中、第二大隊の三中隊も又其の左翼に増加し、相戮力、終に敵を撃退して、同高地の大部分を占領した。然しながら敵はあえて遠く去らず、陽城塞東南方一八二高地及び北大山に現われて猛射し、我は地隙内に入って天明を待った。

天明くるや敵は三面より酷烈に合撃し、我が損害は刻々に増加す。茲に於いて第三大隊は憤然として北方及び東方の敵に当たり、激戦一時間の後之を陽城塞方向に撃攘し、次いで第十一中隊第一線となりて一八二高地に向って攻撃前進したるも、谷地を出るや忽ち敵の集中射を蒙って一挙に数十名を斃された。

梅津大隊長又負傷して、遂に目的を達し得なかった。第二大隊は午前六時頃より一五五高地西方稜線の敵を攻撃し、加藤少佐以下少なからぬ死傷者を出しながらも終に此の敵兵を撃攘し、次いで七時半頃北大山方面より退却する敵兵に猛烈なる追撃射撃を加え、第八中隊を止めて敵情監視に任じ、他は八家子北端に帰還した。

第一大隊は歩二九聯隊長の指揮下に入って、下焼達溝西北高地の攻撃に従事したるも、是又其の目的を達せず聯隊に復帰した。午後に至りて近衛師団は馬耳山を、第十師団は三塊石山を占領したりという報に接し、機逸すべからずと為して聯隊は弾雨の下に隊伍を整え、一倍勇気を鼓して前進に移らんとしたが敵に一毫の間隙なく、反ってややもすれば陣地の支持をすら難かしくなる有様にて、八家子～陽城塞間の道路を挟んで全員戦闘隊形のまま夜に入った。

夜に入って敵の行動は愈々活発となり、其の一大逆襲を期待せる所に午後九時に至り轟々たる大雷鳴と共に大雨沛然として至り、敵弾を避ける為の地隙は忽然として濁流と化した。然しながら地隙をであれば忽ちにして敵弾の犠牲となり。我が将卒は何れも上半身を滝成す雨に打たれ、下半身を濁水に浸しつつ依然として地隙内に蹲居した。それさえあるに敵は此の大雨と夜暗とを利用して、猛然大挙して我が陣地に逆襲した。

固より覚悟せる前哨第一大隊は、乱雨中に之を迎えて死士奮闘し、交戦約半時の後全く撃退することを得たが、剣光は電光と映じ、雨声は銃声と和し、鮮血は濁流に混じて流れ、光景ただ凄絶惨絶を極めた。此の日我に対せる敵は、歩兵八個大隊、砲兵三個中隊。

戦死 中尉黒谷篤造。特務柴山平五郎。下士卒四十四名。負傷 二百四十五名。

参考文献

「大正十一年版 歩兵第十六聯隊史」より